

F. A. Simpson, *The Rise of
Louis Napoleon. New impres-
sion, 1968.*

高村 忠 成

1

本書は一九〇九年に初版が発刊されて以来三回版を重ねられており、評者が使用したのは第三版の第二回刷りである。この息の長い歴史からわかるように本書はいわば古典の部類に属すといってもよいであろう。本書が扱っているのは、ルイ・ナポレオンの前半生ともいえる彼の生誕から、一八四八年に彼が第二共和国大統領に選出されるまでの期間である。詳しくいえば「若きルイ・ナポレオンが彼の伯父がセント・ヘレナでつくったナポレオン伝説を利用し、それを体現しようとする努力した段階を記述し、そして彼が平和裡に生誕の地に戻ってくるまでの三十三年間の彼の人生が、追放と監禁、強制送還と裁判、逃亡と変装など、いかに馬鹿げた冒険からなりたっていたものであるかを示している」(*English Historical Review, April 1911* 本書所収)。

本書の性格は政治・思想・制度の研究書というよりも、むしろ

ろ一個人の伝記に近い。しかしこれが単なる伝記に止まらず、政治・思想などの研究にも極めて密接な関係を持ち、しかもそれらに利するところが多いのは、著者の問題意識、研究方法による。著者は、第二帝政を理解するにはルイ・ナポレオンが権力を獲得するまでの三十数年間にわたる彼の行動、苦勞を知らねばならない。けだしその間の彼の精神態度こそが、第二帝政を生み出す原動力になったからであり、また帝政の政治活動、統治性格などはそれに規定されていることは否定できないからであるとの認識にたっている。そのうえで著者は、ルイの青年時代の人生の軌跡、行動様式を必要な限り詳述し、かつ肝要な事柄についての彼の思想、といってもまだ体系化、理論化される以前の考え、意見などを手紙、新聞への投稿記事などにもとづいて追究している。いわば著者はできる限りルイ・ナポレオンという人物そのものに肉薄し、彼の原体験を再現しようと努力しているといえよう。著者自身、こうした本書の性格をふまえたうえで、本書を、①第二帝政史研究、②ナポレオン皇帝とルイ・ナポレオンとのむすびつきの研究、③ルイ・ナポレオンの初期研究、などに興味をもつ人のために提供したいと述べている。なおこの書評においては、当然のこととして著者の見解を要約して紹介するように努めたが、その際、本書の前記のような性格から、たとえば、ルイ・ナポレオンの心情描写の部分など、原文もしくはそれに近い形で紹介しておいた方が、著者の意を再現して強調できると思われる箇所がかなりあるため、書評というよりむしろ紹介の体裁になってしまったことを恐れ

つつ、おことわりしておく。

近年わが国においても第二帝政研究が関心を呼び、そのひとつの頂点として河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』(岩波書店)が刊行されたことはよく知られている。この書がその期に多角的な角度、重層的次元からメスを入れ、分析した貴重な研究成果であることは論をまつまい。今後もこの業績をふまえ、参照にしつつ、また新たな方向、広がりをもってその期にまつわる研究がなされていくであろうことは想像にかたくなしいし、大いに期待されるところである。こうした動向を考える時、その期に関心をもちもの一人として政治・経済・法・制度・思想などの個別的分野からの考察とともに、本書のような人物を扱った基本的とも、出発点ともいえるものにもあらためて目を通しておくことは、あながち無駄ではあるまいと思ひ本書をとりあげてみた次第である。本書の構成は序文と以下のような本文十二章、さらに appendix として A—C からなる。I、ナポレオン伝説の誕生II、ルイ・ナポレオンの誕生III、流浪と教育IV、イタリア解放の最初の試み—それからいかなる結果が生じたかV、ルイ・ナポレオン—政治的徒弟VI、第一回目の相統要求VII、ルイ・ナポレオン—帝位要求者VIII、第二回目の相統要求IX、ルイ・ナポレオン—政治的囚人X、ルイ・ナポレオン—再び自由を獲得XI、ルイ・ナポレオン—再び市民権を得るXII、長年の果てにA、ルイ・ナポレオンのいくつかの初期の手紙B、参考文献C、ルイ・ナポレオンと第一帝政。以下本文の内容の概略を紹介しながら若干のコメントを加

えることとしよう。

2

ルイ・ナポレオンの思想と行動は、伯父であるナポレオン・ボナパルトの存在なくしては全く考えられない。ルイの生涯の目標はナポレオンの全人格の再現であったといっても過言ではない。そのためにルイが思想と行動の指標にし、また利用したともいえるものは、伯父が残した遺言、すなわちナポレオン伝説であった。それこそルイのいわば原点である。著者は、この当然ともいえる前提にたって、まず「ナポレオン伝説の誕生」から筆をおこしている。

この伝説を扱うに際して、著者はすでに知られているようにその虚構性を指摘するのはもちろんのこと、ナポレオン自身に對しても批判の矢を向ける。ナポレオンの統治は決して理想的なものであったわけではない。多くの不満があった。だがそれが正当に扱われていないのは、ナポレオン戦役に関する資料が膨大なのに比べて、第一帝政下のフランス国内史の研究が、ほとんど公平に注目されなかったからである。また、一八一五年十月、セント・ヘレナに向かう英艦上からすでにメモワールを口述しはじめたことから出発した後述するようなナポレオン伝説に人々が惑わされたからである。人々はその著作から理想的なナポレオン像を創造したのである。だが当時の現実の証拠として帝政末期のナポレオンは軍の信頼を失い、国民から見離されていた。帝政没落後、多くの国民はブルボン朝の復活を無条

件で喜んだわけではなく、ナポレオンのあまりの人と金との乱費に嫌気がさし、彼の没落によってそれが停止されることになったのを歓迎したのである。そしてこの頃のフランスでは、他のヨーロッパ諸国と同じく、立憲的自由主義の精神が支配しており、ナポレオン専制の転覆が自治形態をもつ政府への予備段階として考えられるようになっていた。このように著者はナポレオン支配は賛美の対象ではなく批判のそれであるとまず主張する。

ではそのようなナポレオンを粉飾するきっかけになったものは何か。それこそ「百日天下」とよばれる事件である。多くの観察者や歴史家は、それを「第一帝政没落の偉大なドラマの単なる結論としてしかみていない。しかし、それは実際は、第二帝政台頭の奇妙なロマンスへの序曲」(G. O.)なのである。セント・ヘレナは「偉大な生涯の終りではなく、偉大な創造の始まりである。それはたんなるナポレオンの死の舞台ではなく、ナポレオン伝説の誕生の舞台である」(G. O.)。セント・ヘレナでのナポレオンの生活の成功こそが、彼の伝説を輝かしいものにし、彼はそこで小さな物質的損失を、大きな精神的利益にかえる努力をしたのである。

そしてこのナポレオン伝説は、当時の時代状況の波にのり、ナポレオン崇拜の熱を高めさせることに成功した。すなわち、ウィーン会議はいわゆる反動支配の風潮をもたらし、それに不満をもつ人々の間から、やがて皮肉なことにナポレオンへの憧れがでてくる。プロシヤ、ロシア、オーストリアに反動の嵐が

吹き、啓蒙と平和の新しい統治を目指してリードするといふれこみのキリスト教君公の団一神聖同盟も、反動的政府同盟としての実体を暴露する。そうした中から人々は、やがて大西洋上の孤島にいた、一人の男の言説に耳を傾けていったのである。中でもとくに、ヨーロッパの自由派はそれを進んでうけ入れていった。彼らは、重大な誤りを犯しているということに気がつかなかったのであろうか。

またナポレオン伝説自体は、次のような要因からも台頭の機会をえた。それは当時が、かなり信じやすい時代であったことである。宗教では中世思想への回帰、政治においては正統王朝の復活、建築ではゴシック式の復活、文学ではロマン主義反動の時代であった。その特徴は、常識の時代ではなく、非常識の中に真理を認めることを好んだ。政治的にはつまらない人物、ささいな事件しかない転落の時であった。かくして人々は、全く栄光の現在ではない実在から、全く実際の過去ではない栄光を熱心に見つめた。そこには伝説のナポレオン以上に栄光あるものなどなかったのである。さらに伝説台頭の要因をあげるならば、それはナポレオンが悲運の中で生涯を閉じたからである。彼はそれこそが私の言説の真実を物語るといった。しかし、著者は逆に、それが人々を惑わす結果になったという。もし彼が権力の絶頂期で死んだならば、彼が実際そうであったように残酷で、腕のたつ、冷酷な人物とみられたであろう。彼をとりまいた暗雲の環境こそが、彼の生涯を栄光の色彩で包み込んだのである。彼は非運の中で神秘的に荘嚴にマントを覆い、

自分に対する一切の批判の矢を封じた。すなわち、彼は自分の過去の事柄を、慎重に取捨選択し、目立たせる部分と曖昧にする部分を峻別して記述し、人間の心情を利用することによって自己を美化したのである。

かくして伝説の内容の問題点は明確であろう。その初期の叙述はまだしも、帝政末期については誤りが多い。百日天下の動機は利己的なものであり、その実行の方法は欠陥があり、失敗の結果はフランスにとって不幸な事態をもたらした。しかし、伝説の影響の結果はナポレオンの思うように運び、彼にとって不利な点はことごとく覆い隠され、伝説を信じる中でヨーロッパもまたフランスも、彼の誤った戦争、権力乱用のにがにがしい過去を忘れた。人々は彼が権力を獲得する姿の中に栄光を仰ぎ、その没落の中に悲劇をみたのである。このような過程からナポレオン伝説を再現しようとする者はいくつかの問題点を背負わねばならないと著者は指摘する。すなわち、ナポレオンの名前は文字通りナポレオンにしか適用しない、もしそれを利用しようとするればつねに彼と比較されることを覚悟しなければならぬ。また、ナポレオンの動機と行動の本質は戦争であり、彼はそれを伝説によって副産物にしようとしたが、そのことを誤解して平和のために彼をもちだそうすると無駄な労力を使わなくてはならなくなるであろう。ナポレオン伝説の中で、彼の偉大性は誇張され、欠点は忘れ去られ、目的が理想化され、業績が批判されることなく飾りたてられたのである。

3

第II章は、「ルイ・ナポレオンの誕生」にあてられている。

彼の誕生にまつわるいくつかの問題に焦点を絞って要約してみよう。ルイはナポレオンの弟、オランダ王ルイを父に、ナポレオンの妻、ジョセフィーヌのつれ子オルタンスを母に、彼らの三男として一八〇八年四月二十日に生まれた。彼の誕生に対してナポレオンは大変に喜び、遠征中のスペイン国境からオルタンスに祝いの手紙を送り、祝砲を響かせた。しかしルイの誕生をだれよりも喜んだのはジョセフィーヌであった。というのは、ナポレオンとの間に子供をもたない彼女にとって、ルイの誕生は彼女をナポレオン家につなぎとめる重要な絆になるだろうからである。さらにいえば、じつはナポレオンの弟ルイと、自分の娘オルタンスの結婚を強力に勧めたのも彼女であった。ジョセフィーヌにしてみればナポレオン家の継続ということ以上に、自分が不幸な運命に落とされないよう手をうっておくことが重要であった。ナポレオンの弟ルイは、有能ではなかったがナポレオンの兄弟の中では最も評判がよかった。性格は穏やかで内気、とくに学問を好んだ。一八〇六年にナポレオンによってオランダ王の地位を与えられたが、彼は兄の意のままに動く王になることを嫌い、オランダ人民の意志による王、彼らの利益のために尽せる王になろうとした。したがって兄の圧迫に絶えきれず、彼は一八一〇年にその地位を辞退してしまった。

一方、オルタンスは歌が上手で、その美貌はパリ中に轟きわた

っていた。激しい気性の彼女は、ナポレオンの熱狂的崇拜者で、フランスの軍事的栄光に陶醉していた。だから夫がナポレオンの命令に逆らうことに大変不満で、ルイがオランダ王を辞退した時、二人は別居生活に入った。ここで著者は、二人の離婚の原因を性格の不一致、相互不信などと指摘するが、根本的にはその責任はジョセフィーヌにあると述べる。ともあれ一八〇一年、ナポレオンはマリー・ルイズと再婚、翌年にはナポレオン二世が誕生したため、ナポレオン皇帝から Charles Louis Napoleon と命名されたルイも、いったんはナポレオン家後継の道を絶たれてしまったかのようにみえた。

さてルイの誕生をめぐる疑義がだされている。それは、彼の父はオランダ王ルイではなく、彼にはポナバルト家の血が一滴も流れていないのではないかというのである。その証拠として、彼の容貌、身体つきがポナバルト家の誰とも似てない、ルイの誕生と命名の時父はたちあっていない、一八三一年ローマ法王の手紙の中で、父たることを否認している等々。著者はこれに対し次の諸点を例示して反論する。ルイ王は子供が生まれた時、正式に自分の子であると発表した、根拠のある他の手紙の中では実子であることを認知している、そして、遺言ですべての財産を生存している唯一の息子ルイ・ナポレオンに譲渡すると断言している。またルイ王が個人的にも政治的にもこの問題について秘密をもつ必要は考えられない等々。結局、こうした疑義が生じたのもオルタンスの不義に原因があると指摘されている。ともあれ、一八一四年の裁判によって、ルイは母オル

タンスのもとにひきとられ養育されることになった。

一八一二年ナポレオンはロシア遠征に失敗、一八一四年パリ開城、続いて退位、エルバ島へ流刑。そして、一八一五年三月に彼はパリへ奇蹟の生還をする。この百日天下の時に、オルタンスとその子供たちは活躍した。というのはマリー・ルイズといっしょにナポレオンの子供は連合国の手中にあって身動きできなかつたからである。ナポレオンは Carrousel に集まった連隊を閲兵する時、オルタンスの二人の子供を伴った。また、Champ de Mars での憲法式典にもいっしょに参列させたのである。そして、ナポレオンがワテローの戦いに出発する前夜のルイとナポレオンとの会話は信憑性はうすいが大変有名である。作戦を粘っているナポレオンのひざに七才のルイは涙を浮べてすわる。「どこか悪いのか」と伯父はたずねる。「家庭教師が皇帝が戦争に行くときと教えてくれました」「いけないかね、私が戦争に行くのは初めてではない。泣く必要はない。私はすぐ帰ってくるよ」。「伯父上、邪悪な連合諸国はあなたを殺そうとしております。お願いです私を連れて行って下さい」。その場にいた者は皆深く感動した。ナポレオンは「子供を部屋から出さない」と命じた。そして、「多分彼が私の家系を継ぐたのみの綱になるであろう」と言った (p. 33)。この光景が実在したかどうかは確ではない。だがナポレオンの言ったことは事実になったのである。

第三章は「流浪と教育」である。百日天下後、第二次王政復古になると王党派による反撃がはじまる。ポナパルト家への圧迫は激しく、一八一五年七月一九日、オルタンスとその子供たちはパリを、さらにフランスを去らねばならなくなった。だがフランスをあとにしたからといってその苦勞が終るわけではなく、むしろ始まったといつてよかつた。彼らは、Geneva, Aix, St Gall, Constance, Berg, Thurgau, Arenenberg, Augsburgなどを転々とし、主にスイス国内であつたが、それでも連合国はスイスに彼らを引きとめないようにと警告してきた。彼らに対する警戒が和らげられたのは一八二一年五月、ナポレオンが死去してからである。

こうした状況でのルイ・ナポレオンの教育は決して恵まれたものではなかつた。その主たる原因は、もちろん前述した流浪のためであるが、それに加えて両親の離婚問題が子供に対する教育の責任を不鮮明にしていたからである。それでも、ルイには最初、Abbé Bertrandが家庭教師としてつけられた。だが、彼は陽気で親切ではあつたが、知識は浅薄で教え方も下手であり、要するに教師としてはあまりに無能であつた。そのようなルイに本格的ともいえる教育がなされるようになったのは、裁判でオルタンスが正式にルイを自分の手元に引きとつてよいと決められてからである。具体的にいうと、一八二〇年六月、ルバ Philip Lebas が家庭教師になつて以後である。ルバの父は、大革命の時の共和派のリーダーの一人であり、彼もまた父の血をひいて革新的な思想のもち主であつた。当時二十五才の彼

は、すでに妻子がいたが、ルイの家庭教師を喜んで安い手当で引き受けた。高潔、誠実な人柄の彼は、意志の強い、学者肌の人物であつた。ルバはルイにあつた時の印象をこう書いている。「ルイは才能はもつてゐる。だがあまりにも磨かれていない。また種々のことについてあまりにも無知である。せめて私が七才か八才の時に彼にあつていれば……。しかし、彼は従順だし、私は希望も心配もあるが彼を育ててみよう」(pp. 41—42)と。彼はまず規律正しいスケジュールを組むことから始める。六時起床、七時まで散歩、七時から八時半文法、八時半から九時娯楽・休養、九時から十時半ラテン語、十時半ランチ、十二時半算術、一時ドイツ語、二時ギリシャ語、三時水泳、四時から六時地理・歴史、六時夕食・散歩、八時寢室にてその日の経験を散文・詩にまとめる、九時就寝。このようなスケジュールが粘り強く繰り返された。そして一八二一年の夏、オルタンスがArenenbergに行くことになつた時、ルイはルバの強い要請により Augsburg にのこり、その学校と体育館に通う許可をえた。そうすることによりルバは、家庭教育だけでは身につかない他の少年との触れあいや、彼らとの競争を経験させたのである。なおルバは、ナポレオンが死んだ時のルイの印象について、彼はナポレオンが与えた愛情は殆んど覚えていない、だが彼の鋭い感受性は彼の伯父の死によって動かされた、と述べている。

こうした規則正しいルイの生活も一八二三年頃から乱れてくる。それは父が母のいる Arenenberg をしばしば訪れ、ルイ

に私にあいにきなさいといったり、また冬には家族そろって Rome に行くことが習慣になったりしたからである。ルバはこうした旅行によって生活が不規則になるのを大変嫌ったが、ルイにとっては満足なものであった。一八二七年九月、オルタンスは経済的に苦しいからという理由で、ルバを解雇したが、その本当の原因は、一つは、彼があまりに生活の不規則をやかましくいうからであり、またさらには、彼の明確な共和主義と厳格なピューリタニズムに母と子が飽きたからかも知れない。ルバがたびたび反対したルイの旅行は、成長期の少年にとつては効果的であつたし、ルイがそこで母や父、そして伯父の Eugene やいとこ等々と接触したことは、恥かしがりやで引込み思案の彼には良い経験になった。ルバが心配した生活の不規則については、彼が去つたあとでもルイは、自分で計画をたてて熱心に勉強に励んでおり、その意味ではルバの訓練は実つていたといえよう。

ここでルイ自身のことについても少し触れておこう。少年時代のエピソードで後の彼の人格を知る上で大切な二つの出来事がある。一つは、八才のある日、彼は雪の中を上着をつけず裸足で散歩からもどつてきた。聞けば貧しい身なりの子供に与えてしまったという。もう一つは、十四才の時、いとこの少女が、もっていた花を川の中に落してしまった時、正装のルイはすぐ飛び込んでそれを拾った。著者はこれらの事件は、彼の政治思想上の騎士気取の寛大さを物語っていると指摘する。少年時代のルイの容貌には、身体の弱さと恥しがりやからくる優し

さとそれにマッチしたデリケートな美しさがあつた。顔は広い額、鋭い眼差しでやや陰気であつたが、笑うと明るさを示した。しかしルイの風貌は、成長すると立派とはいえなかつた。口ひげをはやしたが、それは彼の長い顔をさらに長くみせ、ナポレオンとの違いを決定的にした。筋肉質ではあつたが、背は低く胸は長く足は短かつた。だから馬に乗ると彼の姿は立派にみえた。また少年時代弱々しかつた彼は、青年になると荒々しく、そそっかしい、大胆な人物になり、乗馬・水泳・射撃・フエッシングに優れた力を示した。彼はまた軍事教練にも加わり、とくに砲術史と科学に興味をもつた。一八二九年に彼は志願兵としてロシア軍に入隊したいと父に相談した。父は外国のため、異なる旗のもとで軍務につく理由はないと返事をした。これは賢明な判断である。

ルイが七月革命の報を聞いたのは Rome においてであつた。彼は熱心に軍事教練に励んでおり、十月の終りには例年通り Rome に向つた。彼は革命には全く無関心を装つていたのである。革命は多くの国に影響を与え、中でもイタリアは、そのショックを強く受けた。ルイはそのイタリアに向い、やがて革命に深くかかわつていくことになつてしまふのである。著者はここで七月革命にいたるまでのフランスの状況と、一六八八年当時のイギリスの状況とを比較する。両者は一見似ているがしかし大きな相違がある。とくに重要なことは、フランスではナポレオン伝説がますます浸透していったのに対し、クロムウェル伝説には批判の声が高まつていったことである。七月革命の

時、ボナパルト家再興の声もあつたが、ナポレオンの息子は、オーストリアの手に事実上捕われており、しかもあと二年しかもたない病に侵されていた。

5

第四章は「イタリア解放の最初の試み―それからいかなる結果が生じたか」である。ルイ・ナポレオンとオルタンスが Rome についたのは一八三〇年十一月の中旬であつた。彼らが到着して二週間後に、ローマ法王 Pius VIII が逝去し、それによつて一八二一年頃よりくすぶっていたイタリア独立運動は、七月革命の影響をうけたベルギー、ポーランドの独立にも刺激されて、一挙に火をふいた。周知のようにイタリアとボナパルト家との結びつきは大変強く、イタリア国民は半分イタリア人の血を引くナポレオンを崇拜していた。ナポレオンはイタリア国民にイタリア国家の独立、統一こそ自分の理想であると主張していた。もちろんこれはナポレオンにとっては私欲にみちたものであつたが、それでもイタリアの独立運動派は彼を頼りにしていた。またナポレオン没落後は、ボナパルト家にとって、フランスで否定された栄光をイタリアで取り戻そうということが当面の課題になつた。イタリア独立運動を推進していた主要なグループは Carbonari (炭焼党)であつたが、著者は果してルイ・ナポレオンが兄とともにこの秘密結社のメンバーであつたかどうかはまだ確証はない。多分口頭では彼ら兄弟はこのグループの目的と手段に協力することは約束していたのであろうと

指摘している。ともあれボナパルト家の主要なメンバーが同年十二月ローマで集い、何らかの形で独立運動を援助することを決めたことは確かである。その中でもとくに性急であつたのがルイ・ナポレオンと兄であつた。ルイは三色旗を馬につけ、町を歩くことによつて独立運動に加担していることを顕示した。だが市当局はすぐに彼に退去命令を發した。

母オルタンスはこの運動への加担には最も消極的であつた。彼女はこの運動には勝算がないとみて子供たちに深入りしないよう再三警告し、時がくるまで忍耐強く待つよう説得した。だが兄弟は母の説得を無視して、一八三一年二月五日の Bologna での蜂起には先頭に立つて指揮をした。この無暴な行動にはボナパルト家の他のメンバーも反対し、彼らへの財政援助をうち切つてしまった。だがルイは、この時母に書いた。「ボナパルト家の名前と約束をもつ我々にとってはやむにやまれぬ行動です」「私ははじめて生きる意味を実感しました。今まで私は何と無為な日々を過してきたのでしょう……」(p. 67)と。しかしこれ程の熱意をもって協力した独立運動にも、結局は裏切られてしまう。教皇庁はオーストリアに援助を求め、革命軍はフランスに救いを頼む。だが、革命軍の中にボナパルト家の君公が二人いることを知った国王ルイ・フィリップは応援を拒否するであろう。そこで革命軍はルイらを運動からはずすことに決めたのである。かくして彼らの理想は打ちくだかれ、しかも以後二人はオーストリアから狙われる身となつた。各地を転々と逃げる中で一八三一年三月一七日、兄は Faenza で熱病のた

め死去、ルイ自身もはしかにかかってしまふ。こうしたルイを身をもつて守り、何度も摺まりそうになつた彼をやつとフランス国内にひき入れたのは、母オルタンスの勇氣と機智であつた。このようにしてルイの最初のイタリア解放の試みは終つたのである。

イタリア獨立運動への加担はルイにどのような結果をもたらしたのであろうか。まずルイがはじめて砲火をあげ、そして短期間であつたが立派に軍事行動の指揮をとつたことがあげられよう。だがこの経験の中で、ルイは次の二つの事實に直面することになつた。一つは、彼の兄が病死したことにより、ルイがボナパルト家の首長の立場にほぼ必然的に立たされることになつた。一八〇四年ナポレオンは、自分の直接の継嗣がない時は、相続権は彼の兄弟のうち二人と、その男子の子孫に継承されると決定した。兄弟とはスペイン王ジョセフとオランダ王ルイである。ナポレオン自身の子供は病氣であり、ジョセフには子供はなかつた。そのためルイ・ナポレオンが實際的にはナポレオン家の首長にほとんどなつたといつても過言ではなかつた。彼はこのことをだんだん意識するようになり、十七年間、署名する場合はルイ・ナポレオンと書かず、ナポレオン・ルイとした。そしてルイが取扱われ、ナポレオンとのみ書ける目をめざしてさらに努力を積み重ねていった。第二に、イタリア獨立運動への加担は彼の生涯の業績である同国解放への興味をおこさせることになつたのである。もし一八三一年の冬、ルイ・ナポレオンが Bologna 蜂起で子供じみた役割を演じなかつた

ならば、ナポレオン三世は、一八五九年の夏、イタリアのために彼の王位を危機に陥れるようなことはしなかつたであらう。

6

イタリア獨立運動に挫折したルイ・ナポレオンは、母オルタンスの力によりやつとのことフランスに逃れる。もちろんこのこと彼には安全な場所ではなかつた。国王ルイ・フィリップは、一八一五年に母とおぼとがオルタンスに世話になつた負い目があるので、内密に亡命者たちを困惑しつつも面倒をみる。一時は失意の底にあつたルイも再び元氣を取り戻しボナパルト家の権力再興に意欲を燃すようになる。しかも安易に行動に走つたことを反省し、行動しながらも同時にボナパルト家への、いな究極は自分への注目が集まるように巧みに言論活動を利用する。最初は決して自分に野心があるようなことはみせず、だが徐々にその本質を暴露していく。本章では、ルイ・ボナパルトが戦術的にもつけた帝位要求者になつていく過程を扱い、タイトルは「ルイ・ナポレオン—政治的徒弟」とつけられている。ルイ・フィリップがオルタンスとルイ・ナポレオンを警戒したのは当然理由がある。一つは、彼らがフランスに居ることを知っている国王以外の唯一の人物カシミール・ペリエが、彼らは陰謀をはかつていると国王に忠告したためである。もう一つは、七月王政が体制強化のためとつていた帝政賛美のための祝典が近づいていたからである。政府は政權に魂を入れるためナポレオン崇拝熱をおおる方針をたて、毎年五月五日(ナポ

レオン逝去の日)を記念日と定め、一八三一年のその日には Vendôme column にナポレオンの像を建てることになっていた。ルイ・フィリップはこの日にオルタンスとルイ・ナポレオンがパリに在ることに不安を感じ、四日にパリを立ち去るよう彼らに勧告した。だがルイは病気のため動けず、それが幸いして、彼は五日の祝典の模様をホテルの窓から見る事ができた。そこで彼は、ナポレオンを偲ぶ多くの群衆の声を肌で感じたのである。六日、母と子はロンドンへ向け出発したが、その時ルイ・フィリップは、いつの日かルイは再びフランスに戻る事ができ、しかも希望通り軍に入ることも可能となろう、但しそれにはナポレオンという名前を削除しなければならないといった。彼らはその提案を峻拒した。

オルタンスとルイは、一八三一年五月中旬ロンドンにつき、約三ヶ月そこに滞在するが、その後再び Arenenberg にわたった。八月下旬のことである。彼らが到着するとすぐにポーランド革命軍の代表がルイに会いにきて、運動のリーダーになってもらいたいのと要請をした。母の必死の反対もさることながら、ルイはある意味ではイタリア独立運動より重要な意味をもつポーランドのその運動には同情を示さず、しかも自分が利用されるのみであることを十分察知して、その要請は拒否した。ルイの判断は正しくポーランドの独立は失敗に終わった。この頃からルイは、しばし実践活動よりも文筆運動を通して帝政の大義を啓蒙しようと決意するにいたる。もう少し具体的にいえば、一つは帝政の伝統を引くのは自分自身であること、二つに

は自分こそナポレオン皇帝の目標であった自由・民主主義を実現するものであることを訴えることにしたのである。そしてその第一弾が一八三二年五月の『政治的夢想』*Les rêveries politiques* というパンフレットであった。彼は皇帝の後継者はナポレオン二世 Reichstadt 公であると宣揚した。当時 Reichstadt 公はまだ生存していたので、ルイの支持者たちは彼はこのパンフレットが何ら個人的野心から書かれたものではないと称賛した。だが、それから二ヶ月後公は病死し、皇帝の後継者は必然的にルイに絞られてきた。この意味でこのパンフレットは、自分こそポナパルト家の首長であることをはじめて公けに宣言したきわめて野心的性格をもつものであることは明白である。自分は共和主義者である。だが現在は帝政のみがフランスにとって最良の政治形態であり、それによってこそフランス人民の自由は保障される。選挙権は人民に、審議権は議会に、そして人民の意志の執行権は皇帝に……というのが彼の信条であった。続いて『スイスに関する政治的・軍事的考察』*Considerations Politiques et militaires sur la Suisse, 1833* を発表し、この中で彼は中央集権、地方分権の問題を指摘した。さて、この二冊とはちがってかなり専門的、綿密に研究し、しっかりした論文の形をとって発表されたのが『砲術論』*Manuel d'Artillerie* であった。あつかっている問題も砲術という一見何ら政治的・時事的な性格をもつものではない。だがこれこそルイの政治的野心を推進するための有力な武器になったものである。彼はこの本を少しでも顔見知りのフランスの将校に配り、さらに彼らか

ら知人に渡すように依頼した。贈呈の本の中には手紙を添え、読後感を自分のところまで送ってくれるようにと要請した。こうすることによってルイ・ナポレオンの名前は軍隊の中に着実に浸透していった。この本はやがてスイス、ドイツ、イギリスの友人にも送られるようになるのである。

なおこの頃の彼は、ナポレオンのあとを継ぐ固い決意、野心に燃えていたといっても、それがあからさまに噂されることは嫌い、否定した。ところがその否定の方法がとかく嘲笑の的になるものであった。だがルイが後に成功した要因のひとつは、彼は自分が物笑いの種になることを恐れなかったことである。

そして一八三五年末、彼が二十七才の時、その年齢はナポレオンが一七九六年にイタリア戦役で功績をあげた年であることに鑑み、自分もフランス世論により決定的な影響を与えられる行動をとらねばならないと考えるようになり、母オルタンスに、自分は断固としてフランス国民にナポレオンの名前を忘れさせない、そのためにはあらゆる努力を惜しまない旨の決意を語った。無関心なボナパルト家の中であってオルタンスは、ルイのそのような野心を応援した。さらにルイにとってこの頃、重要な友人があらわれた。名前をペルシニー *Persigny* といい、彼は有能な軍人であったが七月革命の時革命を支持して退役、その後パリでジャーナリストになり、一八三四年から熱心なボナパルト主義者となった。ルイは一八三五年に彼とあってから、いよいよ自分の野心を実行に移す決意を固めた。彼らは一八三六年夏までに綿密な計画を練り、ある国境の町から蜂起し、そ

れを拡大していった、やがて中央政府をも手中に収めることにした。ルイの理想は、エルバ島からナポレオンが帰還した時のように無血勝利、パリ入城であった。パリに近く、ナポレオンとのかかわりあい深く、しかも現政権に不満が多い等々の理由から、蜂起の町はストラスブール *Strasbourg* と決められた。

7

第VI章は「第一回目の相統要求」と題し、ルイ・ナポレオンによるストラスブール反乱の模様とそれにまつわる諸問題が詳細に記述されている。ルイは反乱に際して十分な準備を重ね、慎重な計画をたて、一八三六年十月三十日蜂起した。それに先立ち二十五日の朝、彼の母オルタンスに別れを告げに行ったが、その時、彼女はルイの指に、彼女の母ジョセフィーヌがナポレオンと結婚した際、皇帝からもらった結婚指輪をはめてくれた。これはルイにとって母との事実上の最後の別れとなった。蜂起のともとの計画は、ルイがストラスブールで主力を占める第三砲兵隊にあらわれ、ボナパルト家の大義に賛同を取り付ける、そうなれば第四砲兵隊、工兵大隊は続いて味方になり、あとの市民等については武力で威嚇し、全市を手中に収めることができるというものであった。だがルイは途中からそれを変更し、いかなる場合であれ軍事的反抗は行なわない、まして市民を恐迫して服従させてはならない、前線部隊に対してさえ武力威嚇をしてはならないと命じた。彼の理想は兵士と市民、歩兵と砲兵が同時に自然発生的に大義に賛同する民主的熱狂を期

待するというものであった。そのために彼はより最前線の兵士から熱狂の声が上がることを望んだのである。朝六時、出発の時ルイはいった。「諸君、時は来た。今や我々はフランスが栄光の二十年を覚えているかどうかわかるであろう、確信せよ」と(p. 111)。それに対し部下たちからは「フランスは続く」との応答があった。ルイの出で立ち青の砲兵服に身を包み両肩には陸軍大佐の肩章がつけられ、胸には *Légion d'honneur* 勲章が輝き、そして頭にはナポレオンが愛用していたのと同じ帽子をかぶっていた。かつての皇帝を思わせる服装であった。彼はストラスブル駐屯の連隊、歩兵隊の中へと入っていった。

「兵士らよ、諸君のために新しい運命がまっている。諸君の運命は偉大な業績をはじめるといふ栄光である……」、「この驚は諸君らの国家の栄光の象徴だけではなく、その自由の先駆者である」(p. 112-113) 等々と訴えた。「ナポレオン万才！ 皇帝万才！ 自由万才！」との歓呼の声があがった。成功は目前かのように思われた。だが四十六歩兵隊のところで思わぬことがおこった。「兵士諸君、彼はあなた方を欺こうとしている。彼は皇帝の息子ではない。見せかけの替玉にすぎない」(p. 117) との声があがった。ルイの必死の訴えにもかかわらず、やがて疑惑不信の空気は広がり、ついに蜂起は失敗に終わった。もしその時、途中からルイが武力による威嚇に出れば、蜂起はあるいは成功していたかも知れないし、また蜂起が失敗してルイが逃げる時も逃げられたかも知れない。だが彼は、あくまでナポレオンという名の権威を信じていたので武力を行使しなかった

し、逃げる時も、敵・味方両方の流血は絶対に避けねばならないという信念から、抵抗せずに逮捕された。蜂起直前に、ルイはオルタンスに、蜂起は成功したとの報告をするように部下に頼んでおいたので、彼女が「たとえ勝利を収めようと穏便に情けをもつて事にあたりなさい」(p. 121) との返事を書いている時は、悲運にも彼は独房の中であった。

反乱劇はわずか3時間で幕を閉じた。だがこの報告がルイ・フィリップの所に第一報として入ってきた時、官中の耳目を聳動させた。なお、著者は、国王はこの計画については事前に知っていたが、あえて泳がせたのではないか、との説に対して、それは真実ではないと指摘する。なぜならば、ギゾーの回顧録の中でこの時の政府の狼狽ぶりが描かれており、それはまさに突然の出来事であることを物語っているからである。ともあれルイは、十一月九日までストラスブルの牢獄につながれ、十一日にパリに護送されてきた。ルイ・フィリップにとってはこの事件は、勃発した時は衝撃であったが、その処置はそれ以上に厄介であった。真剣な議論が何日も続き、結局ルイは裁判にはかけられないことになった。その理由は、事件そのものが馬鹿げており、新聞でも彼を物笑いの種にして気遣い扱いにしている。それだけ人々の嘲笑の的になればもう十分であるというのである。だが実際は、政府にはボナパルト家のものを裁けるだけの信頼ある判事はいなかったのである。それにしても裁判にかけないからといって彼を釈放するわけにはいかない。そこでとられた解決策は、ルイをアメリカに送ってしまうという

ことであつた。これならば、処置は寛大であるとしても、政府は真剣に検討したという印象を人々に与えることができるし、そして、もしルイがアメリカにそのまま止まれば目的は達せられるし、たとえフランスに戻ってきたとしても、彼に簡単には拭い去れない汚名を着せたことになる。政府はいつの場合でも政權安泰のための処置をとるものであるが、その意味ではこの処置は政府にとって満足なものといえよう。もし裁判で仮に何らかの刑罰が加えられたとしても、ルイならばそれを通して、人民の心をとらえ、政治的殉教者としての彼の重要性を高めるようなことを行なつたであらうことは想像に難くない。なお、ルイがフランスに二度と戻らないと約束すれば彼を自由に釈放しようという条件を政府が出したかいなかの論争があるが、著者は、そのような事実はなかつたと解釈するのが、当時の資料から判断して妥当であると述べる。ともあれルイは、十一月二十一日フランスを離れ、わざわざ南米を回されて一八三七年三月三十日ヴァージニア州に上陸した。

ルイの人格は、蜂起に際しての絶対無血、人民の意志の尊重などの主張にあらわれてゐるが、これらは結果的にみれば、本来の目的に彼を近づけることになつたかもしれない。ただ冷静かつ粘液質の彼の性質は、忍耐を要する状況には適すかもしれないが、蜂起や危機の時には向いていなかった。だが反面では、ルイは蜂起に失敗しても、もちろん平静ではいられないが、かといつて敗けた時によく人が陥るような悲しみや落胆にはかられなかつた。ただ捕えられた時、彼をおそつた個人的悲

しみが二つあつた。一つは、ジェローム王が激怒し、ルイが結婚する予定であつた彼の娘との縁談を破棄したことであり、もう一つは、自分の蜂起に協力した部下の処置であつた。彼は失敗したことよりも、部下を見捨てた卑怯者といわれはしないかと心配した。だが、ルイ・フィリップが彼らを軍法会議ではなく、通常の巡回裁判にかけ、一八三七年一月、彼らは無罪と宣告されたとの報告を、アメリカで聞いた時、ルイは、これで罰は償われたと感ぜるとともに、自分の行動も十分弁護されたと確信した。

8

ストラスブルでの蜂起に失敗したルイ・ナポレオンは、政府の慎重な検討をへてアメリカに送られることになつた。一時は、彼自身アメリカに止まって農業に従事するつもりであると母オルタンスにその心情を語つていた。だがアメリカについてまもなくスイスにゐる母が危篤であるとの報告をうけ再びヨーロッパにまいもどる。ところが、彼がスイスに滞在していることで、緊張關係にあつたフランスとその国との間がさらに悪化し、両国は一触即発の状態に陥つた。いかなる場合でも武力衝突はよしとしないルイは、決意してイギリスに渡る。そしてそこで彼は社交界に出入りするなどして、直接、間接にあらゆる方法を用いて自己の存在を世に訴えていく。こうした経過を本章「ルイ・ナポレオン—帝位要求者」は、折々の問題点を取りあげながら記述している。

ルイはニューヨークに着くや歓迎され、名士扱いされ、彼自身も上流社会に入り友人をつくつていった。ルイと知りあひになつた人々は彼の印象を思慮深い、遠慮がちな、退屈するほど物静かな人物として受けとめた。だがルイは、将来の目的について語る時、必ず私が皇帝の時はこの言葉を使い人々を驚かせた。アメリカでの生活に慣れていくうちに、ルイは当初だいていた農業を行なおうとの計画を放棄し、一年かけてその国を旅行してみようと考へた。そしてその結果を本にまとめてみることにした。実際ルイのアメリカ考察の見解には興味深いものがある。一八三七年四月三十日の手紙で彼は、次のような印象を述べている。「アメリカ諸州は自らの商業的利益のためならば本国とは別の行動をとる。この国は物質的力においては強大だが、精神的力では著しく劣っている。また自分たちこそ自ら選挙して、大統領と議会をもつ政治形態を有する最初の国であると自負している。彼らは独立した植民地としてのその立場を強化しようとしているが、将来何らかの危機と動揺に見舞われるであろう。……この国には行動の権利はある。だが思索の権利はない。獲得すべき自由はある。しかし享受すべき自由はない」(pp. 135—136)と。ただ彼のこの見解はあくまで北部の社会状況しか見ていないものであったから、もし南部の様子も見れば更に違った見方が出てきたかも知れない。

ルイが母危篤の知らせを受けたのは六月三日であった。彼はロンドン經由で Arenenberg の母のもとに八月四日の夕方着いた。彼はすぐに医者を集め入念に診察にあたらせたが、いか

なる治療よりもルイの姿を見て勇気づけられたオルタンスは、それから二ヶ月生き延び、十月九日の朝逝去した。フランス政府は彼女の願望を受け入れ、彼女が生涯もつとも楽しい思い出を残した Malmanson への埋葬を許可した。だがルイに対しては全く寛容ではなく、葬儀後もスイスに止まらうとする彼の姿に、政府はフランス大使を通じて一八一五年にスイス議会が行なつたボナパルト家の者は誰一人としてスイスでの生活を禁ず、との公式宣言を適用してルイを追放するようにスイスに勧告した。しかも一八三八年六月、ストラスブルール蜂起の時の彼の部下の一人 Laitz が、あの事件は大変重要な、またもう少しで成功するものであった、処置についても政府は全く誠実ではなかつた等の主張をパンフレットにした。政府は怒りそれを発禁処分にしたが、それがかえつて功を奏し、そのままにしておけば何の価値もなかつた小冊子を、極めて政治的影響力を有するものにしてしまった。その事情を知つたルイも、反政府系の新聞に心情を訴え、世の同情をえた。かくして一時は物笑いの種になつた人物が、今や政府にとって恐怖の的になつてきたのである。それだけにフランスは危険人物ルイのスイス滞在を許しがたく、同国に更に圧力をかけた。ところがかつてルイが『スイスに関する……考察』でその国を好意的にみていることや、フランスの横柄な態度に腹だたしさを覚えていたスイスはフランスの圧力をはねのけた。かえつてルイの人気は高まり、いくつかの州では彼を州議會議員に選出したり、名誉市民権を賦与したりした。彼はそれらの機会を巧みに利用し自己を

アピールしていったが、自分の最終目標はフランスの市民権をうることであるのを忘れなかった。そうした彼がスイスを去る決意をしたのは、戦争を避けることと同時に、もしここで戦争になったらフランスの世論を政府のもとに結集させてしまうことになるだろうという危惧からであった。彼は出国する時、「私がスイスを去ることによってその国を大きなトラブルから救うことができる」(p. 15)と書いたが、この知らせが伝わるやルイの人氣はますます高まり、彼の名はヨーロッパ中に広まった。それに反してフランス政府がいかにも彼を恐れていたかが白日の下にさらされ、以後彼は、無名の冒険家ではなく、フランスの玉座を狙う公認の帝位要求者とみなされるようになった。イギリスに渡ったルイは、そこでも盛大な歓迎を受け、彼自身も努めて社交界に出入りしたので、やがて名士の一人に数えられるようになった。デイズレーリは、ルイを描写して「週二回、彼の家で夕食会が開かれ、若い政治家は興味をもって参加した。彼は無口であったが会話を弾ませるのに努力し、彼の簡潔にして凝縮した話は衝撃的で忘れられないものであった」(p. 157-158)と書いている。ロンドンでルイは立派な家を買ひ、馬をもち、馬車には帝政の鷲のマークをつけ、オペラへいけばボックス席に入って後に副官を立てせ、あたかもフランス皇帝のようにふるまった。これらはすべて帝位要求実現のための投資であった。なお彼のこのような資金はすべて母オルタンスの遺産から出ていた。彼は資金を主に自分の宣伝のために使用したが、ストラスブール反乱に加わった彼の部下のため、生活

を保障する年金を支払うことも忘れなかった。彼は一八三九年『ナポレオン思想』*Idees Napoléoniennes* を発刊した。それまでの彼の著書は殆んど贈呈であったが、それは安価で売られ、とぶように出て四版まで重ねた。そして一八四一年までには英・独・伊・露・西・ポルトガル語に翻訳された。彼はこの中でナポレオンとその業績をたたえ、帝政の復活のみが行き詰ったフランスやヨーロッパの現況を打開できると示唆した。ただ彼はその帝政復活に最も妥当する人物は自分であると記述することはさしひかえた。この著作はルイの考えをもっともよく表現しているといつてよいであろう。なおこうした風潮を見ていた Lamartine はただ一人、ナポレオン信仰を利用しようとする政府を批難し、さらに『ナポレオン思想』の人氣はナポレオン帝位要求者の危険な台頭を煽るものであると警告した。ロンドンでのルイは、この頃、ささやかな夕食会を続行し、また知人からの招待を受けたりしていた。

9

第Ⅷ章「第二回目の相統要求」は一八四〇年のブローニュ Boulogne の蜂起を取り扱っている。二回目の相統要求の動機、蜂起の経過、そして失敗からその処置についての諸問題が詳細に論じられている。一八三六年の蜂起に失敗した彼は、その後着実な世論づくりを努力し、一八四〇年に入ると自分を待望する声が更に大きくなってきたことを意識した。三六年の蜂起はたまたま不運によって挫折したが、実際は成功したのでは

なかりうかと確信するようになった。そして四年たった現在は状況が好転したと判断した。第一に三六年当時の彼は無名であったが、現在では世間が彼を帝政の後継者として認めている。第二にルイ・フィリップ政府は人気を喪失している。そのため王はナポレオン伝説に救いを求め、ナポレオンの遺骸をセント・ヘレナからパリに移葬することさえ決めた。第三にいわゆる東方問題をめぐる対外政策の失敗でフランスの威信は傷つけられた。人々は東方問題こそナポレオンがその初期において輝かしい業績をあげたものであることを忘れていない。

ルイ・ナポレオンが考えた計画はストラスブール蜂起とそれほど違いはなかった。北方のある部隊を手中におさめる。そしてその影響を中央に拡大していくというものである。最初彼は、今回の反乱の地を「Linc」と決めたが、その地の駐屯部隊の將校から事前の支持をえられず、やむなくブローローニウにかえった。その地は海からの接近が可能で、警備隊の規模も小さく、ここで蜂起に成功すれば「Linc」にも多大な波動を及ぼせると確信した。一切の準備はイギリスで行ない、一八四〇年八月四日の朝蒸汽船で London Bridge をあとにした。総勢は五六名であった。ところが乗船に際してイギリス当局の目を避けるためとった、少しづつ兵を乗せていくという方法が手間取り、船はブローローニウ到着が丸一日遅れてしまった。当初の計画通りいけば、その日は蜂起軍が恐れていた有能な指揮官 Captain ColPuygellier がその地にはいないはずであった。ルイは「われらの頭上に太陽が輝くことは確実である。数日後、われわれは

パリにつくことができるが、歴史は必ず余のこの偉大にして栄光の行動を可能にしたのは、ひと握りの諸君ら勇敢な友人であることを証明するであろう」(P. 174)と鼓舞し、再びナポレオンと同じ服装をして目的地に乗り込んだ。しかし彼の呼びかけに対して敵兵は動かず、Captain は部下に動じないよう命令した。そして蜂起軍は正規軍によって蹴散らされ、ルイは退却しながらもブローローニウから半マイル以上はなれた Column of the Grand Army の天辺に帝国の旗を揚げた。その後彼は海岸に逃げ、救助船に乗りうとしたが国民兵に狙撃されて、生存している部下四人とともに逮捕された。

今回の蜂起の特徴は、前回のストラスブール反乱がその手段において、ナポレオンの名前を聞いただけで人々は同調してくれるだろうという極めて精神主義的な面に傾いていたことを反省し、精神・物質両面の手段を併用したことである。すなわち具体的にはまず、軍隊の主要な幹部には事前に接触して蜂起への協力を要請し、もしそれが成功したあかつきには重要な地位を保証すると誘いかけ、いくらかの金子をつかませようとした。また蜂起の時集まってきた群衆には銀貨を与え、皇帝万才！と叫ばせるように策動した。「兵舎の中には名譽の、外には金の祝儀が惜しげなくバラ散かれた」(P. 179)。だが結果はすべてむなしく終わった。しかも今回は、ルイ・ナポレオンは前回と同じ流血は避けるようにと忠告していたが、蜂起が失敗し、敗走する中で何人かの死傷者を出し、また自らも軽傷を負ってしまう等々、皮肉にも彼自身が精神的のみならず肉体的に

も傷つてしまったのである。逮捕されたルイは、八月十二日パリに連行され、政府はまたもその処置に苦慮するが、結局今回は裁判にかけることにした。

ルイの裁判は九月二十八日に行なわれたが、彼は事件の全責任は自分のみにあると主張して部下を庇い、それ以外の詰問には返答しなかった。ただ彼は許可をえて次の弁明のみした。

「今回の事件の動機は決して私の個人的野心ではなく、フランスが一八〇四年に与えた自由意志を無にするわけにはいかないという信念からです。私は一八三〇年にフランスは国民政府を形成したと信じました。だがこの十年間の悲しむべき経験は私に誤りを気づかせました。だから私は、国民に訴えることを義務と感じたのです……もし私がブローニーで成功していれば私は国民議會を召集したでしょう……なぜならば国民の自由な決断こそが現在の困難と不満を解消することができるからです」。「私はここに一つの原理、大義、敗北を提示します。原理とは国民主権、大義とは帝政主義、敗北はワートルローです。あなたがたはその原理を承認し、その大義に貢献し、その敗北には報復するでしょう。あなたがたと私との間には何の不一致もありません」(pp. 190—191)と。そして彼はこのような裁判は無価値であると結論した。ルイから反省と陳謝の弁を期待していた政府の予想は裏切られ、挑戦状をつきつけられたに等しかった。ルイの弁護士 *Beyer* は、すばらしい弁説で彼を弁護したが、十月六日に下った判決は、フランスの大陸領土にある要塞での終身禁錮刑であった。

第IX章「ルイ・ナポレオン—政治的囚人」は、アン要塞の獄中でのルイ・ナポレオンの生活の様子が紹介されている。その要点は、ルイの心境、執筆活動、脱獄工作、そして獄中生活が後の彼の人格におよぼした影響などからなっている。獄中でのルイの態度は、二度にわたる蜂起の失敗に絶望しているような様子でもなく、あくまで皇帝の継承者としての自分の存在を世に訴え、決して自分を忘れさせないための仕事に没頭していたということが出来る。牢獄ではあったが彼はそれを書斎にかえ、身は不自由であったが精神はその自由度を増した。最も退屈に思える時を将来のための最も多忙な時期にした。決定的敗北とみなされた戦いを次の勝利への布石とした。じつにルイ・ナポレオンの性質が本当の底力を発揮したのはこの時期においてであった。彼がアンの獄中につながれたのは一八四〇年十月七日、この日は皇帝の遺骸をフランスへ帰還させるための軍艦がセント・ヘレナに錨をおろした日であった。彼が入獄した時、警備は厳重を極め訪問者の面会はもとより手紙を出すことも受け取ることも禁じられた。彼が獄中で最初に味った悲しみは、婚約者であったジェローム王の娘 *Mathilde* が、父の怒りも手伝って終身の囚人になったルイを見捨て、十一月に *Anatole Demidoff* と結婚したと聞かされたことであった。しかし彼は、このような時にこそ、破滅と思われる運命をたて直す決意をあらたにした。セント・ヘレナから戻る皇帝の遺骸に彼は牢

獄から呼び掛けた。「子供の時、閣下は私を可愛がって下さり私にいいましたね。『余はそなたを満足に思っている。そなたは余のことを最も案じてくれた』と」(p. 201)。ルイは感情の限りをこめて皇帝に語りかけ、こうした心境で一八四一年に入ると、連日、本格的に仕事に没頭していった。

彼の獄中の執筆活動の最初は一八四一年五月に出した『歴史的断章』*Fragments Historiques*である。この中で彼はスチュアート王朝と七月王政、さらには自分の立場とを比較させ、大衆革命は一人の指導者によってこそ大衆の利益を増進させることができる、というのは成功するためには彼は自分を国民感情のなかに没入させなければならないし、成功を維持していくためには、国民の利益に忠実でなければならないからである等と主張し、暗に帝政を正当化した。同年六月から翌年一月までは、彼はシャルルマーニュの生涯について本にまとめる計画をたてた。シャルルマーニュをナポレオンと平行させそれらの業績をフランス史の中に位置づけようとしたのである。だがこの試みは実現しなかった。二月に彼は『砲術論』の新版を準備し、八月には当時フランスが直面していた問題、すなわち、テンサイ糖を保護する要求をパンフレットにまとめた。わずか三万人の植民地人の利益のため四百万の人々の生活を犠牲にすることはできないとして、彼は保護貿易主義を唱えた。ただ彼のテンサイ糖保護論は、他の関係者のそれとは違って彼の産業論、都市構造論をベースにしていた。というのは彼は、労働の中心を都市に集中させるのは好ましくない。それを田舎に分散させる

ことによって力強い健康な人間を育成できる。大都市の小さな家に人々を詰め込むことによって生じる肉体的精神的害悪から人間を守れるというのが彼の発想であった。彼は後に自由貿易主義に変わるが、その意味においてもこのパンフレットは貴重な資料といえよう。なお彼は、この頃六紙ほどの地方新聞に定期的に寄稿するようにもなった。それらは地方紙であり、反政府的色彩を持つものが多かったが、一般に売れ行きはよく、かつパリの新聞もそれらの記事を引用することがあったので、影響力は大きかった。ルイの主張には共和主義的傾向が目立ち、共和派も彼を利用しようとしたため、両者の間には同盟関係が成立しているかのように見えた。たとえば彼は、一八四三年にある共和派の新聞の編集長に「私が強く望んでいるのはフランスの市民権であり、もし人民が自分たちの自由意志で希望する政府の形態を選んだら、私は全人民に奉仕したいという以外の望みは持っていない。人民の意志にその発展を負っている家族に生まれた私は、もし私が政治組織の基礎として人民主権を認めなかったら、私の家系、本性、常識に対して信頼を裏切ってしまうことになる。私が強い野心を持っているというのは本当である。だが私はそれを堂々と追求した。人民主権の全党派や栄光と自由を熱望するすべての人々を私の知れわたった名前の回りに再び結集することが私の野心である」(p. 212)と答えた。但し彼と共和派との結び付きは心からの融合ではなく、両者の将来に対する思わくは食い違っていた。いわば共通の敵である七月王政を打倒するという点で一致した仮の友好関係であった。

その頃のルイの主張、意見は、その性格が野心的で政治性を有するものが多かったとはいえ興味深いものがある。とくに目立つのはイギリスとフランスの議会運営の比較、教育と宗教の関係、国防観についてである。たとえば彼はイギリスの議会では議員が自分の席から話ができるので討論が自然である。それに対してフランスでは演壇から演説しなければならぬので内容が大袈裟になり固定化しやすくなると指摘する。第二、三の点についてはドイツをモデルにすることを勧めるが、なかでも軍隊の組織はプロシヤのそれが経済的・民主的・効果的であると述べる。そして一八四四年に書いた『貧困の絶滅』*Extinction du Paupérisme*は大変な評判を呼んだ。内容的には、現状批判が大半を占め、その提案は現実的とはいえなかったが、Béranger や George Sand がそれを称賛し、ルイがその支持を取り付ける必要のあった労働者階級から好意をうることに成功した。その年の七月二十八日には前スペイン王ジョセフがフロレンスで死去し、ルイの未来はさらに広がった。年末に、Louis Blanc が彼を獄中に訪ね二人は三日間話しあう。その時は両者は友人として意見を交わしたが、後になって両者が離反した時、ブランはルイ・ナポレオンとの獄中会見の模様を回顧し、当時の彼の考えの本質は制度的にも共和的なものではなく、専制的、帝政賛美であったと暴露した。ただ当時としては、ルイ・ナポレオンにとってはこの会見は有効なものであり、七月王政打倒についての示唆をルイ・ブランから受けた。さて、獄中でのルイ・ナポレオンの心境をもう少し振り返って

見よう。彼は当初、ここでの生活は全く退屈ではないと言っていた。だが一八四三年頃になると本音が手紙に現われるようになった。「私の中には二人の人物がいる。政治家と私人である。政治家としての私は動揺してないし絶対にそうならぬである。しかし私人としての私は大変不幸である。世間、旧友、家族、父からさえ見離され、思い出と後悔に屈している」(P. 222)。

この頃から彼は身体の不調を感じるようになり、頭痛、リューマチ、目の痛みを訴えた。これらは必然的に彼の執筆活動を妨げるようになったが、それでも彼は『砲術論』の研究は続け、その前文を出版したりした。だが身体の故障とともに、やがて彼は長年の投獄によって自分が忘れ去られるのではないかとの焦燥感に絡れるようになり、出獄の方法を真剣に考え始めた。友人や父親に依頼したり、又自分で直接手紙を書いて政府や国王に外国への移住を認めてくれるように働き掛けた。国王からは、ルイ・ナポレオンに絶対に玉座を狙わないという誓約書に署名せよとの条件が出されたが、彼はそれだけは断固として拒否した。だがこのような活発な減刑運動は結果として世の関心を引き、再び彼の名前は人々の口に上るようになったのである。彼のアン獄中での生活は彼のその後の人格にどのような影響を与えたであろうか。著者はその主要な点を次のように分析する。それは彼の思考に瞑想性を強くし、殆んど空想的ともいえる態度を色濃くしたことである。現実から隔離された彼は、つねに現在を未来に置き換え、現実を理想と混同させた。人間の思考は、過去と未来の調和の上に現在という中心を定めるも

のであるが、ルイの場合は、未来性・空想性が中心になってしまった。それゆえこの態度は、彼が現実にも夢を果たして皇帝になつてからもかわることなく、彼はたえず現実を超越した計画をつかもうと勇んだため、結局それが彼の破滅を招くことになつてしまつたのである。

11

本章「ルイ・ナポレオン―再び自由を獲得」は、ルイ・ナポレオンがアンの監獄を脱獄しロンドンに渡つて、そこから帝位要求を継続する模様が記述されている。著者自身、伝記作家は誇張を避けねばならないが、しかしルイの行動はあまりにも奇抜で、滑稽であるので、それを書くとフィクションではないかと読者から疑われてしまう。だがたとえ疑われようと事実は小説よりも奇なりとの格言が示すように、あくまでも事実に即してルイが脱獄する状況を詳細に論じようとの趣旨で、かなり詳しくその様子が述べられている。ここではそれを再現する余裕はなく、そのポイントと、むしろロンドンでの彼の行動について論旨を要約することに止める。彼が出獄の希望に絡れてきた動機は前章でふれた通りであるが、彼は一八四五年十一月まではそれを実行しなかった。その理由は、一つは資金が不足していたためだが、それ以上に、その年月までの間、彼と蜂起に参加した部下がまだ刑に服していたからである。ルイの性格からいって、部下が捕われの身であるのに自分だけが自由になるわけにはいかなかった。アンの獄中で彼に逃亡を促す話がなかつ

たわけではなく、又そのような機会も少なくなかつた。だが彼には部下とも仲間ともいえる同じ囚人を見捨てるわけにはいかない、良心の苛責がそれを許さなかつたのである。ということは、一八四五年十一月に彼の身の回りの世話をしている二人を除いて、他のすべてのものが釈放された時、脱獄への彼の決意は固まつたと言える。彼は時期をみて一八四六年五月に随員の *Conneau* にその意図を初めてあかし、五月二十五日、獄舎の修復工事にきた労働者たちの一人であるかのように変装して脱獄に成功するのである。

ロンドンで彼は友人たちに歓迎され、大層喜んだが、今回の彼への人々の関心は一八三八年ほどではなかつた。彼はロンドンに着くやすぐフローレンスにいる父に会いたい、決して陰謀を企てるつもりはないので通行の許可をいただきたい、との要望をフランス大使に出したが拒否された。なお著者はルイは拒否されるのを承知で、そうすることによって七月王政の無慈悲を世に喧伝し、自分が同情をうるためにこうした要望を出したのか、それとも純粹に父親に会いたかつたのか、それは謎であると述べる。ただ後者の方を事実らしく思わせるかのように、七月二十一日、父であるかつてのオランダ王ルイは逝去した。その後、ルイは健康上の理由もあつて、しばし執筆などもやらず生活も派手になるが、それでも体力をとりもどすために静養し、また、家族の写真、遺品を収集したりして時間を費やした。だが金銭に淡泊な彼は、父親の財産が入つてきたこともあつて、住居・娯楽・愛人などにかかなりの金額をそそぎ込んだ。し

かしかつての部下たちに支払う生活費は忘れなかった。この頃の彼の政治的見解を表わすものとして重要なのは『ニカラグア運河』*Le Canal de Nicaragua*である。これはまだ彼が獄中にいた時、手掛けた仕事であるが、内容はニカラグア湖を横断する運河によって、大西洋と太平洋をむすぼうという遠大な計画である。資金は四百万ポンドで、彼はそれをイギリスの実業家、資本家に要請した。その運河が完成したあかつきには *Canale Napoleone de Nicaragua* と名付けられる予定であり、ニカラグアはこの計画に好意的であつた。だが、イギリスのスポンサーたちは熱意を示さなかつた。結局、この構想は一八四八年の革命によって実現されなかつたが、この著作の方は重要な政治的意味をもつた。一つは、これによって彼の釈放を容易にしようという口実に使おうとしたのではないかということ。もう一つは、この計画を通して彼はアメリカに興味を持ち続け、皇帝になつてからのメキシコ計画のいわば走りになつた。メキシコ計画は彼が皇帝になつてから、当時の政治状況より生じてきた問題という側面だけでなく、ルイにとっては早くからの中央アメリカ千年王国構想の一環ともいえる意味をもつていたのである。さて一八四七年の大きな事件といえば逝去した彼の父親の遺骸が遺言にしたがつてフロレンスからパリ近郊に戻されてきたことであろう。彼の長男は若くして死にすでにそこに葬られていたが、イタリアで死んだ次男(ルイ・ナポレオンのすぐ上の兄)の遺骸もこの際父といつしよに帰還されることになつた。一八四七年九月二十九日のことである。ルイはこれによって家

族の弔いのできたことを感謝したが、同時にそれをさらに自分の存在を目立たせる手段として利用することも忘れなかつた。ここで著者は、ルイは母の死を自分のヨーロッパ帰還への口実とし、伯父(ナポレオン)の遺骸の移送をブローニーニュ上陸の合図に使い、父の死をアン脱出後の自由な立場を確保するための理由にしようとした。偶然か故意かわからないが一族の死を行動の起点にしているのがルイの特徴であると指摘している。

12

第XI章「ルイ、再び市民権を得る」では、七月王政の危機、二月革命、臨時政府、国民議会選挙と目まぐるしい政治、社会的変動の中で、ルイ・ナポレオンが議会選挙に出馬して当選するなど、次第に国民の支持、市民権を獲得していく様相が詳細に論じられている。ここでは二月革命に詳しく触れる余裕はない。ただ著者が、二月革命を誘発した原因としてギゾーにふれ、彼は政治家ではなく議事人であり、国民にアピールするよりブルジョアジーの選挙権に訴え、議会多数派の支持さえ得ておけば統治が可能であるとし、賄賂と圧迫によって支配権を強化しようとした。道義的には墮落している立場を合法的に難攻不落のものとした。そうした彼の政治姿勢と、それにたよつたルイ・フィリップの政府が必然的に崩壊を招いたのであるとの趣旨の指摘に止めておく。さて二月革命の報を聞くやルイ・ナポレンはパリに行き、臨時政府にパリに滞在させてもらいたい旨の要請をした。だが政府はまだ体制が不十分だからとの口実

で彼に出国を命じた。ルイは、三十三年ぶりに母国に居住する権利を持つことができたと思つたが、新政府の立場にしてみれば、自分がパリにいることは迷惑なことである、自分はしばらく引きさがるが、ただ自分のこの犠牲的精神から考えて、自分の目的と愛国心がいかに純粹であるかは理解してほしい旨の伝言を残して再びロンドンへ戻つた。そして国民議会の選挙が四月二十三日に行なわれると決まつた時、彼は多くの支持者から立候補するよう勧められたが、アン獄中にいた時からルイの議会内擁護者オディロン・バローとも相談し、立候補を断念した。理由は資金づくりということ、彼自身に慎重に時を選ぶ識別力が備わつてきたということがあげられよう。その間彼が働き掛けたことの一つに、ボナパルト家のすべての者をフランスから追放するというブルボン家が制定し、一八三二年にはオルレアン家も再確認した追放令を撤廃させることであつた。五月二十四日、彼は抗議の手紙を書き、六月二日には議会でも正式にその問題が提案され、全体的に好意的に審議された。ただその決定は一週間延期されたが、その間に思わぬ事態が発生したのである。それは六月四日の補欠選挙に際し、今回は彼は出馬を表明し四県から選出された。同時にボナパルト派の新聞が次々と発刊され、六月十日には「*Journal*」の連隊で共和国の称賛が拒否され、ナポレオン万才の叫びがあつたという報告が議会になされた。こうした動向に議会は危機を感じ、政府はまだ撤回されたわけではない追放令によって、もしルイ・ナポレオンがフランスの国土に足を踏み入れたら逮捕するよう

全知事に命令を出したと発表した。しかしボナパルト派の群衆は議会を包囲し、皇帝万才と叫んだ。十三日には議会の審議で、ルイ・ナポレオンの選挙が有効かどうかを調査してきた委員会から、*Jules Favre* によって報告がなされ、六月二日のナポレオン家に対する追放令を継続しておくことは国家の恥辱であるとの陳述が引用された。かくしてルイは議会への入場が正式に承認されることになつた。だが彼は十四日に議長に手紙を書き、議員を辞退する意志を伝えた。自分の選挙が混乱を起したことを詫びたあと、「もし人民が私に義務を課するならば、私はそれをいかに遂行すべきか心得ております。しかし私は思つてもみなかつた野心ではないかというようなことをいわれるのには噴飯します。私の名前は、秩序、国民、栄光の象徴です。だからそれが混乱を増長させるために使用されるのは遺憾です。そのような不幸を回避するためならば、私は追放されたままでもよいと思つております。フランスの幸運のためならば、私はいかなる犠牲をも厭いません」(*ib. id.*)と述べた。議会でこの手紙が読まれるや、その高慢な態度に議場は沸き立ち、ルイはさらに手紙を書いて不遜な事態を招いたことを謝罪せねばならなかつた。彼のこのような態度に再度追放令が出されなかつたのは幸いというべきであつた。ともあれ彼が議員を辞退したことは、動機が政略的なものか、又は誠実なものか、いずれにせよ後になって賢明な判断になつた。というのは、国立工場計画が無残な結果に終り、それによって六月暴動が起り、政府はもとより議会の無能性が暴露されることになつたか

らである。いわば彼は巻き添えにならずにすんだわけである。その後、フランスの政治状況が好転せず、その処理にあたっては政府の不手際が目立つわけであるが、著者は原因としてとくに議会から事態收拾のために全権を委託されたカヴェニャックの問題に言及している。彼は危機には対処できても、その後の難局を乗りこえられる人物ではない。彼が收拾の委託を受けてからは、彼の優柔不断、機転がきかない、誤まった判断などが顕著になり、暴動鎮圧時に高まった評判もみるみるうちに地に落ちた。それというのも、彼は元来、家系、教育、信念からいって共和政体を熱心に支持していたが、彼が権力を委託されたのは秩序派からであった。そのため彼としても穩健にならざるをえず、ややもすると六月暴動のあと巻きおこった反動的な氣風にさえ同調せざるをえなくなった。彼は国全体としては共和国を欲していないということを知っていたが、信条としては共和国擁護を崩さなかった。だが、状況はそれを許さず、結局ジレンマにおち込んだ彼の行動は、脆弱さと決断力のなさが目立ち、彼の名声が衰微していくのと同時に、彼がよって立つ秩序ある共和国も崩壊していくのである。この事態の推移を、じつとロンドンから見ているルイ・ナポレオンは、八月末には次期補欠選挙には立候補するという意志を固め、それを手紙につづった。「前回の私の選挙は陰謀の結果ではない。又あらゆる反政府活動に私は無関係であることが証明された。だから私は愛する市民の要望にこたえ、何らかの行動をしなければ私の義務を回避したことになる」(p. 294)と。そして九月十七月の補欠

選挙で、彼は五県から選出され、得票数も前回を大きく上回った。九月二十四日彼はパリに戻り、ここに正式に、また平和裡に彼は帰国し、市民権をえることができたのである。じつに三十三年にわたる逃亡生活に終止符がうたれた。この時ルイは四十才であった。

13

第XII章「長年の果てに」においては、憲法制定にあたり大統領選出の方法をめぐる問題から始まり、同選挙の経過、ルイ・ナポレオンの勝利などが論じられ、最後に著者の彼に対する評価が結論として述べられている。

五月に憲法起草委員会が発足して憲法草案がねられ、九月に議会で審議されることになったが、その時一番問題になったのは大統領選出の方法をめぐるものであった。委員会原案では、普通選挙によって選出されるとあったが、国民議会の補欠選挙でのルイの躍進ぶりに脅威を感じた一部共和派が、普通選挙ではなく議会による選出案を提示した。だが審議の結果は当初の案どおりに普通選挙に落着いた。ただその場合も、反対派はルイの台頭を押さえるため、かつてフランスに君臨したことのある家系のもものは大統領になれないとの条項を入れるように申し入れてきた。だがそれも公平ではないとして否決され、ルイの立候補は保証された。元来ルイ・ナポレオンは演説が得意ではないので、前もって用意した原稿を読むようにしていた。とくに議場での激しいやりとりは苦手と言葉がつかまることがあった。だが

不思議なことに、彼にとってはそうした無口や沈黙が時として有利に働いてくれることが多かった。ルイは九月二十六日、初めて登院し発言したが、議場の自分に対する不信と嫌悪の雰囲気を感じ、以後あまり登院しないようになり、もっぱらやはり議員であった彼の甥に代弁をつとめてもらうことが多かった。そんな彼も、さすがに大統領選出についての前述の条項が修正案として出された時は強く反対し、又十月二十六日には、彼が大統領になるため暴動を策謀しているのではないかとの批難に断固として反駁した。「私は自分の道が岩や落とし穴で邪魔されようとしているのを知っている。私は絶対にそれらにはつまづかない。私はつねに恐れもしなければ怒りもせず、自分で示してきた道に沿って進むであろう……」(p. 304)。彼の自己弁護は短く、決して意を尽くしたものとはいえなかったが、そこには威厳が込められていた。そして彼はそのような主張をもって、正式に大統領選への出馬を声明したのである。

十一月四日に憲法が施行され、十二日に記念式典が挙行されて、いよいよだれが大統領になるかに関心が集中した。事実上の争いはカヴェニャックとルイ・ナポレオンになることは間違いなかった。カヴェニャックには、六月暴動の鎮圧者としての実績、議会の支持、現政権の保持者などの利点があり、さらに加えて、候補者が当選するためには他候補者たちの獲得票数の合計を上回る得票をしなければ、選出権は議会に帰属するとの憲法条項が彼を一層有利にした。だが彼にも弱点はあった。すなわち、暴動鎮圧後の政治・社会状況の建て直して評判を落

し、議会の支持といっても議会自体が不人気であったためにその支持は逆効果になり、現政権を握るとはいえ、政権の中核ともいうべき正規軍からさえも彼は信用を失いつつあった。彼を支持するという共和派は、その数を正確にはかることはできなかった。一方、カヴェニャックにくらべて不利とみなされていたルイにも有利な材料があった。すなわち、彼は議会からは恐れられていたが、それは逆に議会不信の人々からの支持をうる結果になった。カヴェニャックの優柔不断さを怒る秩序党が次第にルイに傾きはじめた。さらに、カヴェニャックが共和各派の正式候補とみなされたので、反共和派はルイの回りに結集していった等々である。さらにこうした要因に加えて、ルイ自身の力についての積極的源泉ともいうべきものを見落してはならないであろう。それは彼の名前であり、経歴であり、そしてフランス国民の王党的体質であった。この中でもとくに重要なのは彼の名前である。果たしてルイと、あのナポレオン皇帝のイメージとはどのようにむすびつくであろうか。その両者が密接な関係にあることは疑いあるまい。ナポレオンの名前がなければルイは何事もできなかったであろうし、だからといってルイがいなければ、ナポレオンの名のみでは何の力もない。その証拠として、他のナポレオン家のものは何もしなかったし、またルイ・フィリップや臨時政府は、たとえば、ジェローム王や、その息子の風貌が皇帝に似ていた Prince Napoleon などには殆んど脅威を示さなかった。まして、彼らは人氣が全くなく評判も悪かった。またナポレオン家の者たちは王朝の未来などを

考えもせず、自分たちが生き延びるためならば、平気で家名を汚したり、権利を放棄したりすることもあった。要するに、ルイしかその未来を真剣に悩まなかったし、彼によってこそナポレオンの名前は完全にその価値を發揮したのである。ストラスプールの反乱が失敗したあと、ジョセフはルイに嘲笑を浴せたが、その時ルイは彼に答えた。「私の企てはたしかに失敗しました。だがそれはフランスに皇帝の家族はまだ死んではいない、献身的な友の支持をあてにできる、そして、その主張は政府からのわずかな分け前を要求することに限定されるのではなく、外国とブルボン家が破壊した組織を訴える人民の主張を再建するところまで拡大しているということを聞かせた。これは私がやったことです。そのことであなは私を非難できませんか」(pp. 316—317)と。ルイこそが休息も財産もなげうち、危険も嘲笑もかえりみず、王朝の再興に尽くしたことは繰り返す必要もあるまい。彼がいなければ、「ナポレオン伝説」も「輝く羽根を虚空でむなしくバタつかせている美しいが力をもたない天使」(p. 308)でしかなかったであろう。ただこの天使はむしろそのままにしておいた方がきれいだったかもしれないし、事実それがルイによって力をもたされた時、その美しさを失ってしまったけれども……。そしてルイにはその名に加えて信念があった。いかなる困難、失敗、冷笑にも彼は屈しなかった。さらに彼は、技術というには適切ではないが、器用というか天賦の才をもっていた。それはあらゆる機会を自分の大義のために利用し、もしその機会がなければそれを創造するという才能

である。その上に、ルイは友人や部下を引きつける、また、引きつけておく魅力に恵まれていた。親友と偽善者を見分けることもできた。「だれ人も自らの召使いに対しては英雄になれない」との言葉があるが、彼はそれに反して、自分をよく知れば知るほど愛着を感じさせる力を有していたのである。もちろんこうした彼の長所に加えて、その人格には欠点もある。それは、彼の人格的輪郭が不明確、実体がとらえにくいということである。とくにそれは、彼が皇帝になってからは、歴史の前にポーズをとろうという意識も手伝ってか、さらに悪化し、ますます正体不明になっていくのである。

ともあれ、十二月十日の大統領選挙では、ルイ・ナポレオンが五五〇万票を獲得して、圧倒的勝利をかちえた。二十日、彼は議長から正當に大統領に選出されたとの宣告をうけ、憲法に宣誓した後に、おだやかな口調で所信を表明した。「私は議会と共に、その行動において空想的でも反動的でもない、公正にして民主的な共和国を樹立したい」(p. 320)と。その夜、彼はエリゼ宮で、ストラスプールのブローニーの蜂起で苦楽を共にしてくれたかつての同志 Vaudrey, Laity, Bataille, Mognard, Persigny などとささやかな夕食会を開いた。ルイ・ナポレオンは決して先見の明があったわけではない。有能な友人たちの鼓舞、幸運な状況などに助けられたといえよう。もちろんそれ以前述したごとく彼自身の強い信念はあったけれども……。多少重複するかも知れないが彼の信念の強さを物語る一八四二年の彼の友人への手紙をここに紹介しておこう。「あなたは私が実

現しようとする大義の方法が子供っぽいという。だが、成功というものはささいなこと無限の積み重ねにかかっています。それこそが最後に価値獲得へとつながります——これは神のみが御存知です。難波船で遭難した一人の男が無人島にいるのを見て、あなたなら、丸太でいかだをつくっても無駄だ、嵐がくればいっぺんに壊れてしまうぞ、船が救助にくるまでまて、というでしょう。私なら彼に、最後は自分で船をつくる道具をあまりみだすまで全力を尽くせ、つねに目的をもっていけば、その仕事自体があなたの精神的支えになるでしょう、という。克服すべき試練にたち向ってこそ人格の陶冶もはかれるのです。あなたが成功すれば、あなたは自分の運命の支配者であることを証明するでしょう」(p. 324)。彼は自分の過去を回顧し、その意味を述べる。「一八三二年、私は生きねばならない人々の中で、評価をうるため論文を書きました。……私の能力を超える仕事であったが私はそれによって軍人の味方をえようとした。……ロンドンでは友人の忠告にもさからって『ナポレオン思想』を発刊しました。私は党派の政治思想を体系化し、私自身がたんなる向こうみずの冒険家ではないということをはっきりさせたかったです。ブローニーが私にとって決定的破局になるかもしれないというのは事実でした。だが私はそこから懸命にはいあがろうとしています……」(p. 325)「要するに私は自分のボートをつくり、マストをあげたのです。あとは神に風が吹いて船が動くように祈るだけです。……あなたは方法と計画ですすめようとする。私は信念をもっているのです」と

(p. 325)。ではこの信念は最後まで通用したのであるか。ここで著者は統治者になるための努力、力と権力を維持する才能、素質とは別であり、ルイはこの典型ともいえるのではなからうかと述べる。換言すれば、帝位要求者としての彼は優れた条件をもっていたが、皇帝としての彼は不適格であったということになる。

最後に、彼の若き時代の経験が、彼の後の精神構造、およびその行動などにどのような影響をおよぼしたであろうか。まず彼の子供じみた手段、方法、これは最後まで続いた。反面、少年時代、貧しい子供に彼の上着をあげてしまったような心の優しさ、騎士道的な勇敢さは消え去ることはなかった。次に、彼の本質的に調和的な統一を求める信条は、彼の精神態度において固定観念になったが、それは思わぬ悲劇を招いたのである。たとえば彼は、軽々しく「自由民に有用なことは、またフランスにも貢献することである」と信じていた。だが現実的には、フランスにとって有用なことは自由民に貢献しなかったし、自由民になした貢献はフランスにとっては有用でなかったことがおこったのである。そして彼はつねに遠大にして広大な理想を懐きつづけた。『貧困の絶滅』『ニカラガ運河』などの構想の實現を夢見、また一種のヨーロッパの愛国主義等について思索に耽った。だが、夢見る人が遠くの水平線にみとれて、足下の障害物につまづくように、ルイは、決して目を地上から離れたことのない敵によって足下をすくわれ転倒してしまうのである。

本書は1項でも指摘したようにルイ・ナポレオンの生誕から始まって、彼が一八四八年に第二共和国大統領になるまでの過程が年代を追って克明にえがかれている。そこには当時の模様を伝える新聞、手紙、知人の証言、政府文書など膨大な生の資料が主として駆使され、史実を忠実に再現しようとの著者の意欲が窺われる。要するに、ルイという人物の行動の軌跡を正確にえがき、しかも直面した問題についての彼の意見、心境を卒直に紹介し、また第三者の証言を挿入したりして、ルイ・ナポレオンを必死に現在に浮び上がらせようというのが著者の意図である。本書は人物論、伝記としての性格をもっているが、著者は本書を単なるそれらの性格として終らせるのではなく、前述の期間のルイ・ナポレオンの心情と行動の軌跡を分析するところが第二帝政の全政治的性格を理解する上での必要不可欠の作業になる。なぜならば、帝位要求者としてのルイの前半生の生き方によって、皇帝ナポレオン三世としての彼の後半生の行動が規定されているからであるとの認識にたつて、その間の関連性を究明することにも務めている。もちろんこの関連性の究明の前提には著者も明示しているように、ナポレオン伝説をルイがいかに取り入れ、それを利用しようとしたかという考察も同時に存在していることはいうまでもない。皇帝ナポレオン三世としての彼の行動は、もちろんすべてが若き日の彼の行動様式に全く制約されているとはいいきれないにしても、こうした著

者の問題意識、ならびにそれへの取り組み方はルイ・ナポレオン研究にとつては重要な角度であるし、本書においてはそれがほぼ成功しているといつてもよいであろう。評者としてはこの点を評価したい。これによってルイの行動の因果関係、一貫性の大綱が明確になり、彼の人物像がきわめて動的、立体的に把握えられている。いわゆる初期研究は、現在では一般的になっているが、本書はルイ・ナポレオンについてのこの種の研究の先駆的業績といつても過言ではあるまい。

このような著者の手法から考えさせられる問題は我が国の本格的な人物論研究の必要性ということである。もちろん最近ではすぐれた研究成果もあるが、一般に我が国のそれは、とかく思想的なものに偏るか、あるいは行動の過程を資料的にならべたものに陥りがちかいかである。もちろんイデオロギイ的に割切つて好悪の感情をむきだしにしたものなどは論外である。ある人物を行動面、または思想面のみに限定せず、両者を調和させながらできる限り客観的に、しかも生き生きとえがくことは難事といえよう。行動の軌跡の記述に終始し、人物像が死んでしまつたり、かといつて創造性に走りすぎても当然いけない。資料をもとに想像力を働かせてある像を浮び上がらせ、そのイメージをさらに厳密な資料をたどつて検証していく。このあたりまえともいわれる作業を繰り返していかねば、生き生きとした、しかも客観性のある人物論をものにするには不可能であろう。その意味でも本書は、ルイ・ナポレオンという人物を理解する上での手掛りになる好著のひとつといえよう。し

かも著者の狙いとする第二帝政史研究のための史料という役割も果たしたといってもよいであろう。なお、本書のもつ価値ないし意義については、評者が先に指摘した点とか、ましてか
 なるのスペースをさいて紹介してきた前項までの内容の概要を
 読んでいただければ御理解いただけると思われるので、ここで
 は詳細な点は省略し、以下評者の本書についての若干の論評を
 記しておきたいと思う。

まず、第I章のナポレオンとその伝説については極めて批判
 的に取り扱っているのに比べ、第II章以降のルイの部分は、全
 体的にかなり好意的な記述へと傾いてきてしまっている点が目
 立っている。もちろん人物研究はいたずらに批判的にすること
 のみが客観的になるとはいえず、かえってその内面性、心情を
 そのままに分析することの方が客観性をおびるともいえるが、
 よしんばそのことを認めたとしても、それでも著者の前述の傾
 向は顕著である。その結果、論調が後半部分になるにしたがっ
 て、ルイの行動を弁明するものになってきてしまっているとい
 うことは否定できない。もっともこれは、ルイという人物の思
 想と行動を、それを規定するナポレオン伝説や、または彼を取
 り巻く環境などを通して浮び上がらせようとする著者の研究方
 法が、かえって彼の行動の責任をそれらのせいにしてしまう
 という、いわばそうした研究方法自体がもつ限界なのかも知れな
 い。次に、ルイの政治、経済・産業論などについての記述がや
 や具体性に欠けている点である。もちろんそれらはそれらとし
 て、別にさらに専門的研究を要するものではあるが、それにし

てもたとえば、政治体制、経済構造のあり方についての彼の意
 見、考えなどをもう少し紹介してみてもよいのではないかと思
 われる。そうすれば、いわばルイの現実認識の視角がより鮮明
 になったのではなからうか。ましてナポレオンやナポレオン伝
 説とルイとの関係を分析するというならば、それらの点につい
 てのもう少し詳細な考察があっても決して不自然ではないと考
 える。そして第三に、ルイの人格形成、なかならず彼の知的成
 長過程における分析をもう少し幅広く行なっておく必要があっ
 たのではないか。というのは、本書の内容からすると彼の知的
 成長はナポレオン伝説以外によってはなされなかったかのよう
 であり、たとえばルバによる教育にしても、とくにどのよう
 な問題をいかに教えたのか、それが彼のナポレオン思想の形成に
 いかに関与したかという点にも言及して欲しかったと思
 う。そうでないと彼の知的成長面についての叙述が平面的なも
 のに終ってしまい、それだけでなくも複雑な彼の行動を理解する
 にはやや不十分との感じがしないまでもないからである。最後
 に、彼の外交論とくにイギリスとの関係について触れて欲しか
 ったという点である。というのは極めて常識的なことである
 が、ルイは何回かイギリスへ亡命するが、その国はいうまでも
 なく伯父ナポレオンを倒した宿敵である。ではなぜイギリスは
 ルイの亡命を心よく受け入れ（もちろんイギリスの七月王政に
 対する外交方針はナポレオン時代のそれとは当然異なるが）、
 ルイ自身もその国との関係をどのように考えていたのかなどに
 ついての指摘はできれば用意して欲しかった。著者はイギリス

とフランスの歴史、政治風土の比較を随所で試みているが、ルイのイギリス観についての所感は忘却している。ナポレオン三世の外交の第一義が伯父を倒した対英配慮にあるだけに、若き日のルイのこの国に対する見方は何らかの形で分析すべきであった。

以上やや外在的ともいうべき評者のコメントになってしまつたが、もとより評者には本書を内在的に批判する資格はもちあわせていない。というのは本書は、著わされてからすでに七〇年近くたつており、その内容は必ずしも現在の先端を行く業績とはいいいないが、しかし膨大な資料を駆使して事実経過、関係を明らかにしているものだけに新にそれらの資料をもとに内在的に検討する余裕はとてないからである。むしろこのような研究の積み重ねの上に今日の研究がなされているといつても過言ではない。よつて評者の前述のコメントによつて本書の価値がそこなわれるようなことは決してないことを付言しておく。なお蛇足ではあるが本書は、一ページ毎に年代と内容の要約語を上段欄外に記載してあり、そのページを開いただけでそこで著者が何を扱っているかがわかるようになってゐる。また索引もじつに詳細にできており辞典のような機能を果たしている。このようない行き届いた配慮は、読者に対するサーヴィスであると同時に、著者が本書に対してもつ自信のほどを示すものであるらう。